24　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。　　〈東京大〉二〇二二年度出題

　私がこれまでに作曲した音楽の量は数時間あまりにすぎない。たぶんそれは、私がひととしての意識を所有しはじめてからの時間の総量に比べれば瞬間ともいえるほどに短い。しかもそのなかで他人にも聴いて欲しいと思える作品は僅か数曲なのである。私は、今日までの全ての時間を、この無にも等しい短い時のために費やしたのであろうか。あるいは、私が過ごした時の大半が、宇宙的時間からすれば無にちかいの間であり、この、惑星のただ一回の自転のために必要な時間にもたない数時間の作品と、これからの僅かな時が、ひととしての私を定めるのであろうか、などと考えるのであるが、それは、もうどうでも良いことであり、いずれにせよ私がすることなどはたかが知れたことであり、それだから後ろめたい気分にたえず落ちいることもなしにやっても行けるのだろう、と思うのである。

　寒気の未だ去らない信州で、のように空へ立つ裸形の樹林を歩き、頂を灰褐色の噴煙にかくした火山のそこかしこに雪を残した黒々とした地表をめていると、知的生物として、宇宙そのものとするほどの意識をもつようになった人類も、結局は大きな、には感知しえない仕組の内にあるのであり、宇宙の法則の外では一刻として生きることもなるまいと感じられるのである。

　生物としての進化のを無限に経て、し人間はへ行きつくのであろうか。

　八年程前、ハワイ島のキラウェア火山にのぼり、火口に臨むロッジの横長に切られた窓から、私は家族と友人たち、それに数人の泊り客らとぼんやりと外景を眺めていた。日没時の窓の下に見えるものはただ水蒸気に煙る巨大なクレーターであった。朱の太陽が、灰色の厚いフェルトを敷きつめた雲のに消えて闇がたちこめると、クレーターはいっそう深くい様相をあらわにしてきた。それは、陽のあるうちは気づかずにいた地の火が、クレーターのかな底で星のように輝きはじめたからであった。

　誰の仕業であろうか、この地表をちあけられた巨大な火口は、私たちの空想や思考の一切を拒むもののようであった。それはどのような形容をもけてしまう絶対の力をもっていた。今ふりかえって、あの沈黙に支配された時空とそのなかに在った自分を考えると、そこではア私のひととしての意識は少しも働きはしなかったのである。しかし私は言いしれぬ力によって突き動かされていた。あの時私の意識が働かなかったのではなく、意識は意識それ自体を超える大いなるものにとらえられていたのであろうと思う。私は意識のからやって来るものに眼と耳を向けていた。私は何かを聴いたし、また見たかも知れないのだが、いまそれを記憶してはいない。

　その時、同行していた作曲家のジョン・ケージが私を呼び、かれは微笑しながらnonsense!と言った。そして日本語で歌うようにバカラシイと言うのだった。そこに居合せた人々はたぶんごく素直な気持でその言葉をれていたように思う。

　そうなのだ、これはバカラシイことだ。私たちの眼前にあるのは地表にぽかっと空いたひとつの穴にすぎない。それを気むずかしい表情で眺めている私たちはおかしい。人間もおかしければ穴だっておかしい。だが私を含めて人々はケージの言葉をかならずしも否定的な意味で受けとめたのではなかった。またケージはこの沈黙の劇にをくわえようとしたのでもない。イ周囲の空気にかれはただちょっとした振動をあたえたにすぎない。

　昨年の暮れから新年にかけて、フランスの学術グループに加わり、インドネシアを旅した。デンパサル（バリ島の中心地）から北西へ四十キロほど離れた小さなヴィレッジへガムランの演奏を聴きに行った夜のことだ。寺院の庭で幾組かのグループが油をしてあちこちで一斉に演奏していた。群衆はうたいながら踊りつづけた。私は独特の香料にむせながら、聴こえてくる響きのなかに身を浸した。そこでは聴くということは困難だ、音の外にあって特定のグループの演奏する音楽をぶことなどはできない。「聴く」ということは（もちろん）だいじなことには違いないのだが、私たちはともすると記憶や知識の範囲でその行為を意味づけようとしがちなのではないか。ほんとうは、聴くということはそうしたことを超える行為であるはずである。それは音の内に在るということで音そのものと化すことなのだろう。

　フランスの音楽家たちはエキゾチックなガムランの響きに夢中だった。かれらの感受性にとってそれは途方もない未知の領域から響くものであった。そして驚きのあとにウかれらが示した反応は〈これは素晴らしいだ〉ということだった。私は現地のインドネシアの人々とも、またフランスの音楽家たちとも異なる反応を示す自分を見出していた。私の生活は、バリ島の人々のごとくには、その音楽とちがたく一致することはないだろう。かといってフランスの音楽家のようには、その異質の音源を自分たちの音楽表現の論理へ組みこむことにも熱中しえないだろう。

　通訳のベルナール・ワヤンが寺院の隣の庭でが演じられているというので、踊る人々をぬけて石の門をくぐった。急に天が低く感じられたのは、夜の暗さのなかで星がのように降りしきって見えたからであった。庭の一隅の、そこだけはなおいっそう夜の気配の濃い片隅では演じられていた。奇異なことに一本のすらされていない。は精緻に切抜かれた型をスクリーンに映して宗教的な説話を演ずるものである。事実、その後ジャワ島のどの場所で観たも灯を用いないものはなかった。私は、演ずる老人のまぢかに寄ってゆき、布で張られたスクリーンに眼をこらした。無論なにも見えはしない。老人の側にってみると、かれは地にし、組まれた膝の前に置かれた多くの型のなかからひとつあるいはふたつを手にとってはくように説話を語りながらスクリーンヘしていた。私は通訳のワヤンにねた、老人は何のためにまた誰のために行なっているのか。ワヤンの口を経て老人は、自分自身のためにそして多くの精霊のために星の光を通して宇宙としているのだと応えた。そして何かを、宇宙からこのへ返すのだと言ったらしいのだ。たぶん、これもまたバカラシイことかもしれない。だがその時、私は意識の彼方からやってくるものがあるのを感じた。私は何も現われはしない小さなスクリーンを眺めつづけた。エそして、やがて何かをそこに見出したように思った。

（武満徹「の鏡」）

〔注〕　○ジョン・ケージ――John Milton Cage Jr.（一九一二～九二）。アメリカの作曲家。

　　　○ガムラン――インドネシアの民族音楽。さまざまなや鍵盤打楽器で行われる合奏。

　　　○――インドネシアの伝統芸能で、人形を用いた影絵芝居。

問１　「私のひととしての意識は少しも働きはしなかったのである」（傍線部ア）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問２　「周囲の空気にかれはただちょっとした振動をあたえたにすぎない」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

問３　「かれらが示した反応は〈これは素晴らしいだ〉ということだった」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

◎問４　「そして、やがて何かをそこに見出したように思った」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ人間の空想や思考という営為をはるかにＢ凌駕する宇宙的存在の前では、Ｃ私の意識もその絶対的な力にとらえられるのみであるから。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔「人間の活動」という内容があれば可。〕

Ｂ＝３〔宇宙が「絶対的」であることを説明。〕

Ｃ＝４〔「私の意識」という部分がなければ減点１。その上で「意識」が機能しない状況を説明。「包摂される」「身を委ねるほかない」などの表現でも可。〕

問２　Ａ巨大な火口の超越性に圧倒された人々に、Ｂケージは軽口によって Ｃ火口が一つの穴に過ぎないというＤ一面の事実を気づかせたということ。

Ａ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３〔人々の様子について説明。〕

Ｂ＝２〔ケージの態度について説明。〕

Ｃ＝２〔火口への評価を説明。〕

Ｄ＝３〔人々がケージの言葉をどう受け止めたかを説明。〕

問３　Ａフランスの音楽家たちは、Ｂ記憶や知識の範囲にないガムランを、Ｃ自分たちの表現論理に新たな可能性を与える Ｄ素材と見なしたこと。

Ｂ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「かれら」が誰かを説明。〕

Ｂ＝３〔「ガムラン」は必須。「記憶や知識の範囲にない」の部分は「未知の響き」「異国的響き」なら減点１。この部分に関する表現がなければ減点２。〕

Ｃ＝３〔異国の音楽を自分たちの音楽論理に組み込むことを説明。〕

Ｄ＝２〔ガムランを一つの構成要素としてみていることを説明。「材料」などの表現でも可。〕

問４　Ａ影絵を演ずる老人の間近で何も映らないスクリーンに、Ｂ論理で対象化する意識をＣ超越した宇宙の存在とのＤ交感を感じ取ったということ。

Ａ・Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「そこ」が何も映っていないスクリーンであることを説明。〕

Ｂ＝２〔「意識」について説明。「空想や思考」などの表現でも可。〕

Ｃ＝３〔感じ取っているものの内容について説明。「絶対的」などの表現でも可。〕

Ｄ＝３〔「宇宙と会話」の部分を説明。〕